

2025 年 4 月 18 日

研究休暇報告書

南山大学長

ロバート・キサラ殿

所 属 人文学部 日本文化学科

職氏名 教授 岩崎典子

受入研究機関等：主に自宅および南山大学研究室、必要に応じて短期で国外（英国）や国内（岡山、沖縄、沖永良部島）に打ち合わせおよび調査に行く予定。

期間：2024 年 9 月 16 日から 2025 年 3 月 15 日

目的：留学・移住などへの移動、話者のアイデンティティと接触場面における相互行為の関わり、第二言語としての日本語使用者のオノマトペ使用の研究のため

研究休暇は、相互に関わるいくつかのテーマの研究を進めることを目的としていた。研究休暇中も対面授業を複数コマ担当していたこともあり、すべてのテーマの研究活動を進めることはできなかったが、「留学・移住などの移動とアイデンティティ」、「地域言語話者の言語使用・言語復興と話者の意識」「移動表現におけるオノマトペの日韓比較」については特記すべき進展があった。

「留学・移住などの移動とアイデンティティ」については、松田真希子氏（東京都立大学）が責任者である基盤研究（A）「移動基盤社会デザインに寄与する繫生語ネットワークの国際共同研究」の分担者として、2 月にボリビアのオキナワ移住地の第一日ボ学校で開催された「国際繫生語ワークショップ」で登壇したほか、サンタクルスの日本語教室で日本語教育に携わる日系や沖縄系の方々にお話を伺った。多民族国家であるボリビアへ移住した日系・沖縄系の 3 世、4 世の方々のことばの学習・継承・教育についてのお考えを聞くことができ、移動とことばについての理解を深めることができた。3 月に琉球大学で開催された琉球継承言語研究学会では、「ボリビアのオキナワ移住地 3 世の言語ポートレートと語りからみる沖縄語継承」と題して初期結果の発表を行った。

上記の発表は、分担者として関わるもう一つの科研プロジェクト基盤研究（A）「琉球沖永良部語を中心とした消滅危機言語の記録保存と継承保存を並行して進める研究」（責任者は国立国語研究所の山田真寛氏）とも深く関わる。本プロジェクトの一環として、10 月に沖永良部島で沖永良部語（ユネスコが日本国内で消滅の危機にある言語として挙げた

6つの琉球諸語のうちの一つである国頭語に属す) について、12月には、宮古島市池間島でやはり消滅の危機にある宮古語池間島方言について聞き取り調査を行い、島の人びとの言語再活性化についてのお考えを聞いて理解を深めた。また、3月にハワイ大学マノア校で行われた消滅の危機言語の保存と継承のための国際大会 **International Conference on Language Documentation and Conservation** で共同研究者の方々と“**Collaborative Revitalization Project Showcase: with five communities of Japonic languages**”と題したポスター発表を行った。さらに、3月半ばに国立国語研究所で開催された「危機言語の保存と日琉諸語のプロソーディー合同研究発表会」では、共同研究者の高智子氏（元国際交流基金関西国際センター）と共に沖永良部島での言語復興のための活動（LINE スタンプ作成会）について報告した。また、国立国語研究所の第19回フォーラム「子どもたちが大人になったときにも、島のことばが聞こえる世界を残すために」ではブースを持ち、沖永良部語と日本語（共通語）のバイリンガルのカルタや絵本を使用して沖永良部語を学習した大学生の感想、および言語習得・言語教育の専門家としての言語復興のための活動についての意見を共有した。

第二言語としての日本語オノマトペ（いわゆる擬音語、擬声語、擬態語、擬情語の総称）の使用については研究を進められなかったものの、日本語と同じくオノマトペが豊富であることで知られる韓国語のオノマトペ使用との比較研究を進めることができた。10月にメルボルンで開催された第31回 **Japanese Korean Linguistics Conference** で、“**Translating motion event descriptions in *Harry Potter* into Japanese and Korean: Focus on Manner encoding and deixis**”という口頭発表を共同研究者の Park Jiyeon 氏（松山大学）と行った。この発表では *Harry Potter* の韓国語翻訳と日本語翻訳のオノマトペの使用を分析し、使用頻度は同等でも異なる傾向が見られることを報告した。この発表のプロシーディング論文は間もなく刊行される予定である。

「話者のアイデンティティと接触場面における相互行為」の研究そのものには進展がなかったが、接触場面（言語や文化の背景の異なる人びとが接触する場面）に関しては、学部3年生のゼミ生と韓国の極東大学の学生の COIL としての協働活動の実践研究の報告を行い、学生がオンラインでの接触場面で問題解決のための話し合いをした成果を検校裕朗氏（極東大学）と韓国日語教育学会で報告した。その報告内容をまとめた「日韓大学生の COIL 活動—学生の主体性による対等性の担保と脱カテゴリー化」と題する論文が3月末に韓国日語教育学会の『日本語教育研究』第70号で刊行された。

今後、研究休暇中に得ることのできた新たな知見やデータを生かして、未完論文の完成のほか新たな論文執筆などを行う所存である。

以上